

ツユクサ（アオバナ、ボウシバナ、カマツカ）

牧 幸 男

ツユクサは、何処にでも咲くいわゆる雑草である。しかし、朝露に濡れて咲くツユクサの鮮やかな青色は美しく、野草の中でも目立つと思う。

ツユクサは、身近な環境に生育する、ツユクサ科の一年草で、我が国や東南アジア固有の植物である。一見すると、ひ弱な感じがするが、引き抜いて放っておくといつの間に根を出し、容易に生き返ってしまう繁殖力の強い植物でもある。

生育状況は、茎の下部は地上に横ばい、盛んに枝分かかれし上半は斜上し、無毛で太く下部では根を出す。葉は2列で互生し無毛緑色柔らかい、夏に、苞葉に包まれた総状花序が苞葉外に出て青色の花を開く。花は早朝咲きはじめ、強い日光に当たるとしおれてしまう短命な一日花である。しかし、蕾が苞葉に2～3個包まれているので、次々と咲き、2～3日咲いているように見える。花は咲く時だけ苞葉から顔を出して開き、しおれると苞葉の中に再び戻り、そこで果実が成長し結実する。



ツユクサの花

『新訂牧野日本植物図鑑』には、ツユクサの名を使っている類似植物は、ツユムラサキ以外にムラサキツユクサ *Tradescantia ohioensis* とオオムラサキツユクサ *T. virginiana* の2種が収載されている。この中で、ムラサキツユクサは従来の同じような場所に咲いている。

ムラサキツユクサは、カナダ南部からアルゼンチン北部のかけての新大陸、西インド諸島原産の多年生草本で、明治初年(1870 頃)渡来し、草花として諸処の畠や庭に栽培されているが、現在は、ツユクサと同じように野生化している。高さは50cm 内外、茎は円柱形で多汁、青みのある緑色、葉は散生する。5 月頃から夏の間、枝先に多数の花が集まって咲く。ツユクサは一年草、種子で増殖するが、ムラサキツユクサは、多年草で毎年咲く。ツユクサとの違いは、よく観察すると花が大きいので差が分かる。オオムラサキツユクサは全体の植物色が薄ので、区別は可能である。



ムラサキツユクサの花

我が国では、古くから知られ植物で、薬用や染料に使用、『万葉集』(629～759)に月草^{つきぐさ}（鴨頭草^{つまくさ}）の植物名で9 首収載されている。ツユクサの利用は、この花で染めた衣の色が変わりやすいので、6 首まで「移ろふ」の意味に用いられている。また、『枕草子』(1001)も同様「つき草うつろひやすうなるこそうたてあれ」と「ツユクサは、色あせやすいのはいやなものだ」と述べ、色の美しさに引かれるもの、

退色しやすいことに困惑していた様子が分かる。『古今集』でも、詠み人知らずで「いかで人はことのみぞ月草のうつし心は色ことにして」の記載がある。

友禪染めの下絵を描くときに用いる青花紙の製法と使用方法の色素の調整は、朝に摘んだ花びらを絞って青汁にし、^{てんぐじょうし}典具帖紙（岐阜提灯に用いる用紙）に塗って染み込ませ乾かす。この操作を約百回繰返してできたのが青花紙（青花）と呼ばれる色素を含む紙となる。この青花紙が友禪の職人の手に渡ると、彼は青花紙を小さく切って水に溶かし色素を取り出す。この青色花液を手軽に友禪染めの下絵を書く絵具に使うようになった。このため、友禪の技術は急速に発達したと言われている。

ツクサは日本人の感性に合っているのだろうか、今日でも話題となっている。徳富蘆花は『みみずのたわごと』で、「つゆ草を花と思うのは誤りである。あれは色に出た露の精である。」と記述している。宮永真弓著『つゆ草秘抄』（昭和5年）には、紀伊半島の縄文遺跡から約4,000年前の露草の種子約800粒がみつきり、播種したところ、幾つかの花を咲いたと記述がある。

ツクサは、日本人の感性にあっているのか、生活に取り入れたり、詩歌の対象に古くから採用された。

朝咲き ^{ゆうべ}夕は消ぬる ^け鴨頭草の ^つ消ぬべき恋も あれはするかも 万葉集（作者不詳）
よごれたる おどろがなかに ^つ鴨跖草の ^き花かもさかむ 水ひきていなば 長塚 節
露草の 瑠璃をとばしむ ^か鎌試し 禅寺洞
露草の 露の命の あとやさき 西島麦南

植物名は、「露草は露を帯びた草の意、青花は花卉の色、帽子花はぴったりくっついた苞葉の様による、カマツカの意味は不明。^{つき}搗き草は古名で着草の意で、花で布を刷り染めしたからである。月草と書くこともある。漢名は鴨跖草である。」と牧野富太郎博士は述べている。このうち着草は『本草和名』（918）や『和名抄』（932）に既に登場している。別名は多く『日本植物方言集』（1972）には185の別名が収録されている。主な別名は^{はなだくさ}縹草、帽子花、藍花、青花などがあり、由来は、縹草は縹色（淡藍色）に染まるから、帽子花は苞葉の様子から、藍花、青花は花の色による。また、平賀原内（17828～1780）は『物類品鑑』（1763）で「^{おうせきそう}鴨跖草、和名ツクサ、又は、ツクサ、又アオハナと言う。」と述べている。学名は *Commelina communis* で、属名はオランダ人の植物学者 Jan Commelin(1629-98)と甥の Caspar Commelin (1667-1731) に因んでいる。特に、若くして亡くなった Caspar の息子をツクサ属の3花卉のうちの目立たない1枚に^{なぞら}擬えたものとされている。

英名は dayflower で、花が短時間しかもたないことに沿う短命の悲しい運命であることが感じ取れる。

薬用は、漢方の利用はなく、民間療法が主で、生薬名を^{おうせきそう}鴨跖草と呼び、解熱、利尿、解毒として、かぜ、熱性下痢、水腫、心臓病などに用いる。一般薬の^{しょうこう}紫雲膏は、江戸時代から火傷、切り傷、湿疹、痔などに用いられてきた軟膏である。

食用は、使用しない。

花言葉は、「ひとときの幸せ」「尊敬」「快活」、白色は「僅かの楽しみ」「豊潤」、班入りは「恋の心変わり」「敬われぬ愛」「密かな恋」である。

